

はじめに、全国社会科教育学会会長木村博一先生、前会長棚橋健治先生、審査に関わられた学会関係者の先生方、ご推薦いただいた先生方に心から感謝申し上げます。また、本研究の遂行にあたって貴重なご助言をくださった広島大学の川口広美先生、静岡大学の村井大介先生にも心からお礼申し上げます。さらに、研究に協力してくださった現職の中学校の先生方にもお礼申し上げます。

本研究は、中学校社会科教師がどのような教科観・授業観を持っているのか、それをどのように形成したのかを、5名の中学校社会科教師へのインタビュー調査によって明らかにすることを目的とした研究です。教師の教科観のなかでも、社会科という総合的な性格を持つ中学校社会科について教科観を明らかにすることに本研究の独自性があると考えています。本研究を通して、教師のもつ社会科観は、将来生徒になってほしいと考えている市民像と、今こうあってほしいという生徒像と、社会科独自の内容や方法に対する教師の考え方によって構成されることを明らかにしました。

私が本研究を通して主張したかったことは、教員研修についてのあり方についてです。教員研修には、様々な経歴・背景をもつ先生方が参加されます。こうした研修を設計する際、「教師の持つ教科観には違いがあることを前提に」することや、研修は「教科観の形成と一体となって進められなければならない」ことを、研究を通して提案することができました。

本研究に取り組むきっかけは、「中学校教育現場にかかわる先生方は自分自身の教科観についてどのように認識し、それを授業に体现しているのか」ということについて関心を持ったことです。そして、先行研究をまとめ、インタビューを行っていく中で、先生方の語りが多様であり、観点が異なっていることに気がきました。中学校教師の方々は毎日試行錯誤しながら授業をおこない、生徒と関わっておられます。先生方は、忙しい日々を過ごしながらも、ご自身の力量を高めるためようと努力されています。そのための研修において、大切なことは一体何か、インタビュー調査重ねながら私はそのことを考えるようになりました。そしてインタビューから明らかになった語りの多様性は、研修を設計するうえで欠かせない要因であると直感しました。

本研究の過程で最も力をいれたことは、中学校社会科教師の方々へのインタビューと、そのインタビュー内容の分析です。本研究では、半構造化インタビューを行いました。先生方が自己の取り組みを振り返りながら自身の教科観を自由に語るができるように質問をつないでいくにはどうすればよいか、インタビューを重ねながら考えました。多様な語りの中から、一人の先生のまとまった教科観をどうやって引き出すか、考える日々が続きました。また、インタビューデータの分析についても、私一人の力では整理しきれないことがよくありました。そのたびに、冒頭で感謝の気持ちを述べた川口先生や村井先生をはじめ多くの研究者の方からご助言をいただきました。本研究は、そのような先生方や、インタビューにご

協力いただいた中学校社会科の先生方、指導教員の先生や同期や後輩の院生らの支援のおかげで完成させることができたと思っております。

今、私が最も関心をもっていることは、「学校外の外部人材と学校教育・教科教育に携わる教員との連携」と、「学校教育に関わる外部人材の方々がもつ教育観・教科観」です。私は2017年4月から2020年3月まで地方自治体における教育の魅力化を推進する「教育魅力化コーディネーター」として、学校教育の現場にかかわってまいりました。そして、4月からは社会科教師として中学校に勤務をしています。教育魅力化コーディネーターという立場の時は、教師のように学校教育に直接的に関わることはなかったのですが、教育に関心を持ち、関わろうとする地域の方々との出会いが多くありました。その時は、私自身が外部人材という立場でした。そして、中学校社会科教師という立場になった今、教科の目的に照らして外部人材の方々とどのような協力ができるのか、どのように協力すべきかについて考えています。今後は、社会に開かれた教育課程、地域社会に開かれた学校づくりの実現を目指して、教育実践と研究に一層力を尽くしたいです。

全国社会科教育学会からこのような特別な賞をいただけたことを、大変うれしく思っています。一人の教員としてはもちろん、社会科教育の研究に携わる者としても、これから一層精進していきたいと思っています。本当にありがとうございました。